



ツルから学ぶこと

理事長 百瀬邦和

本号で取り上げていますが、今冬、北海道のタンチョウに鳥インフルエンザが確認され、遂に危惧していたことが現実になってしまいました。インフルエンザの原因であるウイルスについては分からない事が多く、新型が見つかる度に私たちは右往左往しています。

(ウイルスと人類との歴史については、現在Webサイト、nippon.comの連載記事：人類の天敵「ウイルス」で、本会顧問の石弘之さんが解説をされています。ご一読下さい。)

この、生物かどうか分からない厄介なものによってタンチョウが絶滅する危険性があります。野生本来の状態とはかけ離れた、人間の生活圏に近接して生活する現在のタンチョウの状況は、その危険性が高いのです。今、鳥インフルエンザへの対応として私たちがすべきことは、現在も続くCOVID-19への対応から学ぶところが大きいと思いますが、その一方で、病気への対応や対処について、私たち人間は鳥たちから学ばなければならない事があるように思います。昨シーズンに鳥インフルエンザにより8000羽ものクロヅルが死亡したイスラエルでは、今シーズンは飛来数が半減したそうです。今冬、ナベヅルの大量感染が起きた出水では、一時は越冬地に集まっていたツルの群れの半数近くが韓国の順天に移動したらしいということです。北海道のタンチョウは、今シーズン大給餌場以外での確認が大幅に増えました。これは野生の生き物が持っている危機への自然な対応なのかもしれません。

以前出席した勉強会の中で、ウイルス学が専門の根路銘国昭博士が「科学者としては不適切な言い方かもしれないが、危険な感染症は人間が安定した自然環境を攪乱した所で発生するような気がしている」と話されたことを思い出します。私たちは自然に対して、もっと謙虚にならないといけないと思います。

巻頭言	・・・ 1
タンチョウの鳥フル	・・・ 2
サロベツ標識調査	・・・ 3
2023年 総数調査	・・・ 4
2023年総数 結果	・・・ 6
太陽光発電要望書	・・・ 6
<連載>	
鳥と自然と人⑯	・・・ 7
標識のはなし	・・・ 7
<活動記録>	・・・ 10

タンチョウの鳥インフルエンザ発生とその監視活動

Outbreak of Avian Influenza and Countermeasures

昨年9月末から全国各地で鳥インフルエンザ（鳥フル）に感染した野鳥が確認され始め、11月に入ると鹿児島県出水市でツル（主にナベヅルとマナヅル）への感染が一気に広がりました。出水で収容されたツルは3月末までに1400羽を超え、同地で越冬しているツル類の10%に迫る程になりました。道内でもカラスなどの感染が確認され、タンチョウへの感染を懸念していましたが、2022年11月20日に釧路市音別町の音別川で、衰弱した幼鳥1羽が発見・収容され、鳥フルの感染が確認されました。今冬は飛来が遅く、感染個体が確認された時点では、大部分のタンチョウはまだ音別川周辺に集まっておらず、給餌場での本格的な給餌が始まる直前でした。環境省は大規模給餌場での給餌を一時控え、給餌の際は広範囲に餌を撒くように要請しました。

しかし行政を含めて、私たちにできることは限られています。そこで、タンチョウ保護研究グループ（RCC）は、COVID-19への対応を参考に、感染個体の早期発見、早期対応が最も必要だと考え、大規模ねぐらの監視活動を行うことにしました。冬季ねぐらである河川は通常は目視による監視ができない場所が多いため、まずはドローンを使って正確なねぐら位置を確認しました。また、出水市の担当者から鳥インフルエンザを発症したツルは水辺に寄るようだという情報を得たことから、ねぐら付近に監視カメラを設置しました。監視対象にしたのは、陽性個体が確認された音別川、三大給餌場の一つである阿寒給餌場に近い阿寒川、そして三大給餌場に次いで多くが集まる中茶安別給餌場のチャンベツ川の3カ所です。

チャンベツ川では、会員の渋谷さんにドローン調査のご協力をいただきました。また、私たちの活動と連動して、鶴居村でも村役場の主導で、定期的にドローンを使った雪裡川の監視が行われました。

監視カメラ設置から3月下旬までの3か月間、毎朝夕、カメラから送られてくる映像を確認しましたが、異常な様子の個体は見つかりませんでした。また、給餌場で異常があるツルの報告はなく、今シーズンはタンチョウの鳥インフルエンザの感染拡大は無かったと判断しています。

一方で残念な結果に終わってしまったことがあります。感染していた幼鳥には足環 433 が付いていましたが、それが対策に生かされなかったのです。この幼鳥には同時に足環を付けた兄弟の432がいたので、この標識個体を頼りにして濃厚接触者と思われる家族を捜索することができたはずだったからです。この家族が最後に確認されていたのは感染した幼鳥が保護された日の42日前で、直線距離44km程離れた地点でした。これ以降、RCCの総数カウント調査や前後の調査でも幼鳥432は確認されませんでした。

タンチョウが繁殖地に戻り始める3月に、432と433を標識した豊頃町の牧場に行き、牧場に來ているツルの話を伺ってきました。ツルはもう戻ってきていて、3羽、4羽で飛んでいるのを見たが、幼鳥や足輪付きのツルは見えてはいない。牧場につがいの2羽が来ていて、その様子から昨年も来ていたつがいだと思っている、とのこと



ドローン調査の様子(上)

監視カメラで撮影された川の様子(下)



でした。432は行方不明のままですが、親の2羽は無事だった可能性があるように思います。来冬に向けては、今回の鳥インフルエンザでの経験を踏まえ、環境省、北海道、各市町村、NGOなどがそれぞれに具体的に何をすべきかを精査し、役割を分担し、連携協力して活動することが重要だと考えています。

サロベツでの標識調査の話（道北の現場の様子と発信機個体の移動）

百瀬 邦和

Survey for the Red-crowned Cranes in Sarobetsu Marsh

Kunikazu Momose

今年2月26日にNPO法人サロベツ・エコ・ネットワークが行なった、サロベツタンチョウ報告会一渡るサロベツのタンチョウからの情報を基に、道北におけるタンチョウの現状と発信機装着個体の動きについて紹介します。

サロベツ湿原の位置する北海道北部地方（道北）では、2004年にサロベツ湿原でひとつがい営巣を始めてから、徐々に分布範囲が広がり、営巣数が増加してきました。2月の報告によれば、2022年には道北地方で8つがいの営巣がありました。この中には以前から営巣が確認されていた稚内市、浜頓別町、枝幸町（P9の記事参照）の状況は含まれていませんので、道北地方における現在の繁殖つがい数は10つがい以上にまで増えているのは確実でしょう。道北各地で目撃されている個体数は、合わせて30羽を超えています。道内でのタンチョウ生息数に占める割合は、道北地方とほぼ同規模のオホーツク地方、そしてその半分程度の道央地方を合わせると、北海道全体の10%弱にまで増えてきたことになります。

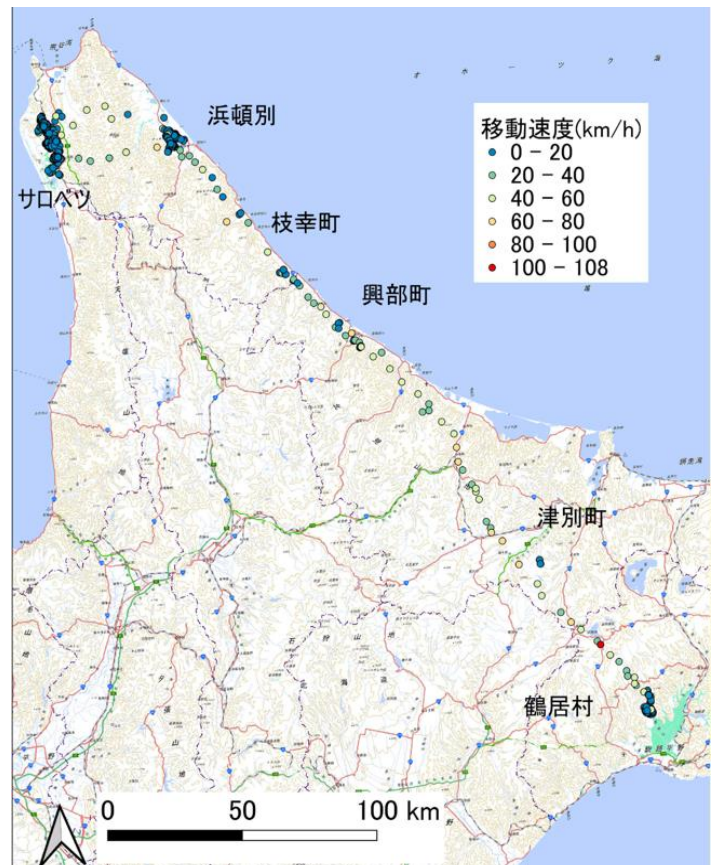
サロベツ・エコ・ネットワークは、2020年より道北地方に生息しているタンチョウの状況を調べる活動を始め、その中で、サロベツ湿原で繁殖して

いるタンチョウに足環や発信機を付けて、その動きや越冬場所を調べる調査を行っています。タンチョウ保護研究グループは捕獲、発信機・足環装着の際の技術指導や個体の追跡調査に参加・協力しています。

サロベツでは一昨年（2021年）と昨年（2022年）に4羽ずつ、計8羽のタンチョウに足環を付けました。発信機は2021年に1羽、2022年は3羽に付けましたが、この内順調に追跡できたのは各1羽（426と429）でした。

426は2021年11月末にサロベツを離れ、山を越えたオホーツク海側のクッチャロ湖で一ヶ月近く止まっていました。12月24日になってようやく同地を出発し、海沿いに南下してサロマ湖の西で方向を変え、真っ直ぐ鶴居村の給餌場（越冬地）に移動しました。クッチャロ湖から鶴居村までの間に、枝幸町と津別町で一泊しています。春の移動は3月18日に鶴居村をスタートし、秋とほぼ同様のルートでサロベツに戻りました。秋とは違い、途中での長期の滞在はありませんでしたが、天候の影響もあったのでしょうか、サロベツ到着までに6日を要しました。

429は2022年11月17日にサロベツを出発し、オホーツク海沿岸を南下して興部町まで一気に飛び、1月27日まで2ヶ月以上、そこに滞在しました。そのまま越冬するのかと思っていましたが、厳寒季に興部を飛び立って、何と大雪山を飛び越えて十勝川上流に向かったのです。2月の報告会に参加された北海道バンダー連絡会の大館さんによれば、同氏が大雪山に入って直接観察したところ、ガン類などの大型水鳥が同じルートを移動しているとのこと。鳥たちは地形を見ながら飛んでいるのか、風を読んでいるのか、あるいはその両方か、興味深いところでした。



426の2021-22年の秋と春の移動経路

（長谷部 真ほか 2022年日本鳥学会大会発表資料より）

十勝川を下った429は帯広市近くまでの200km程を一気に飛び、十勝川で2泊したのち、十勝地方南東部の浦幌町まで移動して、越冬しました。429は興部では足環のない2羽と一緒にいたのが観察され、浦幌でも同じく3羽でしたので、同じグループで移動してきたのかもしれませんが。浦幌町からは3月14日に移動を開始しました。越冬地？の浦幌町での滞在は1ヶ月半程だったということになります。帰路についた429は、十勝川を上って新得町を経由し、一旦はそのまま北の大雪山方向に向かったのですが、なぜかまた新得に戻りました。

そして、今度は東に回り、大雪山を迂回して、足寄町から上川盆地に入りました。上川の比布町からはほぼ真っ直ぐにサロベツに向い、3月20日



429 浦幌町下頃辺川近くの堆肥置き場にて



資料提供：サロベツ・エコ・ネットワーク長谷部真氏

にサロベツ湿原に到着しました。429は同地で1羽でいるのがサロベツ・エコ・ネットワークの長谷部さんによって観察されているので、春の移動は1羽だけだったのかもしれませんが。

今回追跡した2羽は、越冬地までの移動距離が300km以上と長く、さらに出発した繁殖地に比較的近いクッチャロ湖、興部川で長期滞在をしたこと、その後越冬地に到着するまでに一泊以上していることなどに共通点があります。この様子は、ロシアや中国で繁殖している大陸のタンチョウの渡りの様子とよく似ています。留鳥とされてきた北海道のタンチョウが道北に分布を広げたことで、渡り鳥としての動きを示し始めたと解釈できるのではないのでしょうか。また放鳥時に426はすでにヒナを連れた成鳥でしたが、429は2歳または3歳の若鳥でした。このことから、経験の少ない若鳥は移動（渡り？）の際のルートやその方法等について試行錯誤している様にも見られます。道北のタンチョウが渡りを始めたとすれば、若い個体がこの試行錯誤によって、渡りの経路上にある中継地を新たな越冬地や繁殖地とする可能性、また違った方向への渡りコースを開拓するという可能性も期待できるのではないのでしょうか。道北から日本海沿岸を南下、あるいは内陸部を石狩川に沿って南下するといったコースが開拓されれば、道央で繁殖・越冬しているグループと合流し、さらには南下して道南から本州に向かうというグループが出てくることが期待できます。

2023年 冬の総数調査が行われました 富山 奈美

Winter Census FY2022 Nami Tomiyama

今年も2023年1月20日～1月31日の間、冬の総数調査が行われました。この調査で、現在の北海道に生息するタンチョウの総数と、どの地域を越冬地として分布してるかがわかります。この情報はタンチョウを保護していく上でとても重要な情報です。しかしながら、時間と労力のかかるこの調査を行うには、調査に参加して下さるボランティアの皆さんの協力なしでは、続けていくことはできません。今年は63名の皆さんがご参加くださり、無事調査を終えることが出来ました。本当にありがとうございました。

今年の総数調査の様子を皆さんにお伝えしたいと思います。

音別（1月20日） 音別で越冬するタンチョウたちは、午後の給餌時間が近づくと一斉に川から給餌場へ飛んできます。調査しているこちらは、大忙しですが、餌を食べ終わるとさっさ川へと帰っていきました。

阿寒（1月21-22日） 阿寒では、朝の給餌時間に一番ツルたちが集まります。給餌場とビオトープの2カ所に餌をまくので、2班に分かれて調査をするのですが、どちらの場所にツルが沢山集まるかは、ツルの気分次第なので、分かりません。そこで、ツルの動きに合わせて、調査員も移動。2つの班を行き来しました。

十勝（1月23日-24日） 車で移動してツルを探しました。積雪が多く風も強かったので、調査は難航するかと思われましたが、皆さんの丁寧な観察で広範囲にツルが確認できました。

塘路・標茶・弟子屈（1月26日）
この日も車で移動してツルを探しました。かなりの数のツルが見つかりましたが、農家さん情報で、「夕方にならないとツルは来ないよ」という場所もありました。ツルの出勤時間もフレキシブルです。

中茶安別（1月27日） この給餌場には、飛べないツルがおり、道路を歩いて横断して給餌場まで移動するのですが、給餌場から川への帰り道にこちらを気にして道路をなかなか渡りません。そこで全員移動。ツルが無事に道路を渡った後、調査を再開しました。

鶴居村（1月28日-29日） 伊藤サンクチュアリと鶴見台の2カ所に分かれて調査をしました。今年は午前、午後の2回の給餌が行われているので、ツルの動きがどうなるか気になるころでしたが、2日目の鶴見台で面白い出来事があったので、お話ししたいと思います。朝9時の給餌の後、餌を食べ終えたツルたちは、給餌場の周辺に散らばり始めました。近くのアシベツ川に飛んで入るもの、歩いて奥の牧場の堆肥山に移動するもの、北側の土が露出した丘の縁に集まるもの。給餌場の中のツルの数は70羽くらいまで減りました。そこに1羽のハクチョウが舞い降りました。最近の鳥インフルエンザの流行で、タンチョウの感染を防ぐため、給餌人がハクチョウの追い払いをしています。タンチョウは給餌人を覚えているので近づいても飛ばず、ハクチョウだけが追い払われます。1度追い払われた後、再びハクチョウが降りてきました。そこで追い払いに給餌人が給餌場に入ったのですが、何を勘違いしたのか、周辺に散らばっていたタンチョウが、急に動き始めました。まずは奥の牧場にいたツルたちが、行列になって歩いて給餌場に戻ってきました。それをみて今度は、北側に集まっていたツルたちも歩いて給餌場に戻り始めました。戻ってきたツルたちで給餌場はごった返し、ケンカになり、鳴き合いが始まります。そうすると今度は、騒ぎを聞きつけたアシベツ川のツルたちが飛び立ち、どんどん給餌場に集まってきました。あれよあれよという間に、給餌場のツルは250羽まで増えました。給餌場に餌はありません。調査している私たちも一体何が起こったんだろうとアレコレ説明を考えたのですが、追い払いにきた給餌人をみて餌をもらえると勘違いしたタンチョウが、給餌場に戻ったのにつられて、他のツルたちも集まってしまったのではないかという話になりました。時計をみると、13時を少し回ったところ。次の給餌の時間は14時で、まだ1時間近くあります。はたしてツルは待つことができるのかとみていましたが、



中茶安別給餌場の様子
道路脇にはツル横断注意の看板があります



鶴居村 鶴見台の給餌場の様子

やっぱり待てなかったようです。

再び先ほどまでいた牧場や丘、アシベツ川へとぼらぼらと戻り始めました。一番驚いたのは、完全に諦めて雪裡川のねぐらに帰ってしまったツルたちがいたことです。これから給餌があるのに、もう帰っちゃうの？とこちらが心配になってしまいました。結局、午後の給餌の時に集まったツルは140羽ほど。午前よりも少なくなりました。午後の給餌まで残ったツルたちはゆっくり餌が食べられたかもしれません。

浜中・厚岸・根室・別海・中標津・標津（1月30-31日） 広範囲の車での調査になりましたが、各班が続々とツルが確認し、集計すると過去最高の数を記録しました。

1日かけて野外でツルを観察するという機会はなかなかありません。長い時間のようにも、実際やってみるとあっという間に時間がたってしまう。初めて参加する方でも、終わる頃にはいつの間にかベテラン調査員と変わりなく調査しています。この記事を読んでご興味を持たれたら、ぜひ調査に参加みませんか。ご参加をお待ちしています。

2023年総数カウント調査の結果をお知らせします The Result of Winter Census FY2022

今年のタンチョウ総数カウント調査の概要がまとまりました。

今年度の総数は1850羽、うち幼鳥は210羽となりました（総数は50羽単位、幼鳥については5羽単位でまとめてあります）。総数は昨年よりわずかに多くなりましたが、7年前の2015年と同数です。この7年間に個体数の大きな増減はなく、総数は1800～1900羽台で止まっている状況です。

しかし、その一方で冬季の分布の様子は大幅に変わってきました。十勝全域から釧路湿原・チャンベツ川地域までは前年に比べても、大きな変化は見られなかったのですが、浜中町～根室地域、オホーツク、道央地域での確認数が軒並み増え、合わせて昨年と比べ100羽ほど増加しました。繁殖地から大給餌場へ移動せずに、周辺の牧場の餌に頼って越冬する個体が増えています。しかしながら、越冬地が増えたことは必ずしも喜べる状況ではありません。新たな越冬地では、餌のほとんどを牧場に依存しています。牧場がなくなったり、牧場の経営形態が変われば、越冬地はなくなってしまいます。今後も慎重に動向に注目していく必要があります。

タンチョウ保護研究グループの最新情報をご覧ください。

フォローをよろしくお願いいたします。

ホームページ



instagram



Facebook



太陽光発電所に関して共同要望書を釧路市長に提出しました Joint Request for Solar Power Plant Submitted to the Mayor of Kushiro

タンチョウ保護研究グループは3月7日に、釧路自然保護協会をはじめとする9団体と共同で、釧路市の蛸名市長に要望書を提出しました。要望書は、現在釧路市内で急速に導入が進んでいる太陽光発電用のパネル群が自然環境に大きな負担を与えることなく着実に進められるよう、立地の適正化を図る条例の制定を要望するものです。

当日の市長訪問の際には、釧路自然保護協会の神田房行会長らとともにタンチョウ保護研究グループも同席しました。共同提出団体とその概要は以下のとおりです。

共同提出者：釧路自然保護協会、猛禽類医学研究所、NPO法人トラストサルン釧路、
認定NPO法人タンチョウ保護研究グループ、NPO法人環境把握推進ネットワーク-PEG、
NPO法人釧路湿原やちの会、道東昆虫研究所、公益財団法人日本鳥類保護連盟釧路支部、
一般社団法人北海道自然保護協会

要望書：「釧路湿原周辺における太陽光発電事業に関する意見および再生可能
エネルギーと地域共生のための実効性のある釧路市条例の制定に向けた要望」

意見1 太陽光発電所の無秩序な建設による釧路湿原の美しい景観の悪化が懸念されます。

意見2 タンチョウ、チュウヒ、オジロワシ、シマクイナ、オオジシギ、キタサンショウウオなどの
貴重な野生生物の生息環境への影響が懸念されます。

意見3 太陽光発電施設の建設が無秩序に進むことで釧路市行政計画との大きな矛盾が生じています。

要望1 再生可能エネルギーと地域との共生が進むよう、実効性のある釧路市条例を制定することを
要望します。

<連載> 鳥と自然と人①⑥ 韓国の渡り鳥事情

石 弘之 (本会顧問)

Birds, Nature and people #16

世界で約11,000種が生息する野鳥のうち約2,000種が渡り鳥だ。しかし、これらの渡り鳥のうち約14%が絶滅の危機に瀕している。長距離移動する鳥は、気候変動、中継地の環境破壊や汚染などの地球規模の変動にきわめて敏感だ。私たちにとっては、渡り鳥は環境が健全かどうか知らせてくれる重要な環境指標でもある。

国連環境計画 (UNEP) によると、過去30年間で渡り鳥の個体数はほぼ半減した。気候変動は渡り鳥にとって深刻な影響を与えている。温暖化は鳥の渡りのサイクルを狂わせ、渡った先で季節が先行していて餌が十分に得られないなどの問題を起こしている。渡り鳥のヒナの体重が年々低下して、個体数の減少につながっているという調査もある。

こうした調査は欧米では盛んだが、アジアのデータは少ない。隣国の韓国の嶺南大学やソウル大学の調査データを入手したので、その現状を報告しよう。1997~2005年と 2013~19年の間、韓国で繁殖する52種の個体数の変化をモデル化した結果、38%が減少したとみられる。

このうち、7種は46~95%の減少率を示した。最高の減少率を示したのはカワセミ科のヤマショウビンだ。東アジアの温帯から熱帯に分布し、東南アジアやインドなどで繁殖する。日本では旅鳥であり、南西諸島を除いて観察例は少ない。この7種のうち5種までが、気候変動が主因とされる。また、2種は採餌場所とした農地の変化が理由だ。韓国では、1980年から 2014年の間に水田が33%減少した。とくにビニールハウスの急増が農地の減少に拍車を掛ける。何やら状況は日本そっくりだ。

標識鳥のはなし

百瀬 邦和

The Stories of the Ringed Cranes Kunikazu Momose

この冬も、RCC事務局に沢山の方々から足環を付けた個体についての情報をお寄せいただいています。ありがとうございます。情報を整理していくと、ツルがどのような生活をしているかを読みとくことができます。今回も興味深い動きがありましたので、ご紹介したいと思います。

スラリーから生還した185の現在

根室地方でのカウント調査の際に別海町西春別で、牧場の奥にある堆肥山に上っているつがいを発見しましたが、その1羽に足環がついていたため牧場の方をお願いして場内に入れていただき、足環番号を読むことができました。そしてその際に同牧場での昨年の出来事についてお話を伺いました。

この牧場には以前から足環の無いつがいが来ていて、夏には隣接の牧草畑を子連れで歩いていることもあったそうです。ところが昨年夏につがいの1羽がスラリーに落ちて死んでしまったとのこと。その時には残ったツルがスラリーの近くでしきりに鳴いていたそうです。しばらくすると遠くから別のツルが鳴いているのが聞こえてきて、次に気づいた時には足環をつけたツルと2羽で来ていたというのです。

この足環付きのツルが185なのですが、実はこのツル自身もスラリーと縁のある個体でした。11年前の2012年9月27日の夜、環境省釧路事務所の担当職員と私がスラリーに入って保護し、放鳥に当たって185番の足環を付けた当年生まれの個体でした。この牧場では保護活動に熱心に参加・協力して下さり、スラリーに降りる際の梯子の提供、投光器の配備、体を洗うための給湯設備の提供、そしてこの個体を一晩保護しておくために子牛用の小屋を改造してくださいました。そして、翌朝早く放鳥して下さったのです。親鳥と無事に合流した185は一緒に鶴居村の給餌場で越冬し、その後親離れした後も毎冬鶴居村の給餌場で確認されていました。DNAによる性別判定はしていませんが、これまでの観察ではメスだろうと推測されています。



*編集部注釈

スラリータンク(スラリー)とは牛が出す糞尿を分離せず、液状のままタンクに貯めて発酵処理する直径20-30m程、地上高1.5m、地下5-8m程の施設です。道東ではこれを使う牧場が多くあります。タンクの上部が開いているため、この中に降りたツルがはまっておぼれ死ぬ事故がしばしば起きています。

越冬地以外での185の確認は2019年と20年の2回だけでしたが、いずれも今年確認した西春別でしたので、既にこの近くに定着していたのでしょう。そして、昨年の夏、近隣つがいのスラリー転落事故の結果を受けて後添えに来たということになります。185は直前の昨年冬には鶴居村でつがいで確認されていて、今冬は鶴居村以外での初めての越冬ということになりましたので、185にも昨年の春から夏に何か事件があったのかもしれませんが、奇しくも、転落したスラリーから生還した個体がスラリー事故で相棒を失ったツルの後添えになったということになりました。

スラリー事故は近年増加していて、釧路市動物園によれば近年の保護収容個体の中で5%程にもなるそうです。昨年にも複数の事故が報告され、先日(2023年3月)も西春別の近隣の牧場で1羽が保護されました。185を目撃した牧場では、昨年夏のスラリー事故の報告はしていないようでしたので、こうした未確認の事故は他にもまだまだ沢山あるのかもしれませんが、せめて新しい185のつがいが再びスラリーに飛び込まないように祈っています。

枝幸で繁殖していた193の2022年秋の興味深い行動

193は2013年に鶴居村幌呂地区で行ったヒナへのバンディング調査で標識されたメスのタンチョウです。標識されたタンチョウでは初めて道北に定着、繁殖した個体のため、多くの方が観察に関わっていて、

記録も沢山届いています。

親から独立した1歳・2歳には弟子屈町で過ごし、満3歳になる2016年4月にオホーツク地方（遠軽町）に現れました。直前の同年3月には鶴居村、豊頃町で目撃されていますから、この辺で一緒になったオスと一緒に動き始めたのかもしれませんが。同年5月からはさらに北上して、道北の枝幸町で夏を過ごしました。この頃から、枝幸町の村山さんが「イッキュウさん」と呼んで熱心に観察されています。193のつがいは翌2017年には繁殖を予想される行動が観察されましたが、実際に繁殖が確認されたのは2019年が最初です。その後2021年まで枝幸町で毎年繁殖し、十勝地方幕別町の十勝川付近で越冬していました。移動の途中には一度だけ置戸町内の常呂川で目撃されているので、枝幸町からオホーツク地方を南下した後、北見市付近から山を越えて十勝に移動しているのが予想されます。

村山さんからの連絡では、昨年（2022年）夏に193の営巣地付近でつがい相手が怪我をしているのが見つかり、8月以降は1羽だけになったそうです。10月半ばに193と思われるタンチョウが繁殖地から25km程南下した同町音標地区で見つかり、10月28日にはなんと生まれ故郷の鶴居村に1羽で現れました。鶴居村では、ほぼ10日間、収穫後のトウモロコシ畑で確認されていたのですが、鶴居村での最終確認から2日後の11月8日には再びオホーツク海沿岸の湧別町で見つかりました。この時もやはり1羽で、何やら仲間を探すように遠くを見ながら鳴いていたのが印象に残っています。ほんの200m程離れた隣接した畑には2羽連れのタンチョウがいたのですが、お互いに全く無反応で、193は特定の相手（3ヶ月前に居なくなってしまった連れ合い？）を探しているようにも見えました。繁殖地の枝幸町から鶴居村までは直線距離で約240km、湧別町は概ねその中間に当たりますので、193は連れ合いを探しに100km以上の距離を戻ったのかもしれませんが。

本誌でもたびたび報告している国後島で繁殖しているベラヤも、秋に別海に移動してきたのち、越冬前に一旦国後島に戻っていたので、一部のタンチョウにはこうした秋の移動形態があるのかもしれませんが、193の今回の動きはつがい相手がなくなった時の特殊事情だったのかもしれませんが、興味深い動きでした。

湧別で確認した1ヶ月後の12月、193は例年通り十勝の幕別町に1羽で戻ったようです。



山を越えてオホーツクへ向かう家系

2020年に弟子屈町札友内で標識した同腹の393と394（ともにオス）は、その年は繁殖地で両親と冬越しをし、親と別れた後も、2021年秋まで弟子屈町内に居たようです。ところが、393は2022年4月からはオホーツク海側の紋別市で確認され、冬もそのままそこに残って、2023年1月29日には湧別川で確認されました。この時期に当地でタンチョウが確認されたのは初めてで、同時に近くではヒナ連れの3羽家族も確認されています。オホーツク地域での393は毎回2羽で観察されているので、今夏以降に紋別市～湧別町周辺で繁殖をはじめることがあります。一方、同腹の394の方も2022年5月に弟子屈町内で確認された後、同年9月14日にオホーツク海側の小清水町で見つかりました。兄弟揃って、しかし別々に満2歳の夏をオホーツク海側で過ごしたことになります。

393と394には別の年に同所で標識した同じ親と思われる336と337の姉妹がいます。336は満1才の2019年8月と10月、2020年3月に網走市と小清水町で確認されています。337は放鳥後に行方不明となってしまいましたので情報が得られませんでしたが。歴代の兄弟が山を越えている理由には、弟子屈町がオホーツク地方に近いという地理的条件が関係していると思われるのですが、もしかしたらこれらの兄弟姉妹達には開拓者の遺伝子？があるのかもしれない、とも想像を膨らませてしまいます。同地域でのさらなる標識付けが望まれます。

<活動記録> (2022年12月～2023年3月)

- 12月7日 会報Tancho47号 発送
鳥インフルエンザ監視のためドローンでの音別川ねぐら周辺調査(百瀬・富山)
- 12月9日 運営会議 7名出席
- 12月14日 環境省のタンチョウ保護増殖検討会ワーキンググループ会議に出席(百瀬)
- 12月16日 釧路町の再生エネルギーゾーニングに関するヒアリング
- 12月17日 ドローンでの茶安別川のねぐら周辺調査(百瀬・澁谷)
- 12月21日 鳥インフルエンザへの監視協力依頼のため阿寒中学を訪問(百瀬)
鳥インフルエンザ監視のため阿寒川でドローンによるねぐら調査と監視カメラ設置(百瀬・富山)
- 12月23日 TKG73増刊号 発送
- 1月8日 中標津俵橋湿原のニオに監視カメラ設置(百瀬・大河原ほか)
- 1月14日 カウント調査勉強会(於:わっと 富山・百瀬・百瀬ゆりあ)
- 1月15日 鳥インフルエンザ監視のためドローンでのチャンベツ川ねぐら周辺調査(百瀬・澁谷)
- 1月17日 鳥インフルエンザ監視のため茶安別川のねぐらに監視カメラ設置
鳥インフルエンザへの監視協力依頼のため中茶安別小中学校を訪問(百瀬)
- 1月18日 鳥インフルエンザ監視のため音別川のねぐらに監視カメラ設置(富山・百瀬)
- 1月20日～31日 カウント調査(百瀬、富山、吉野、貞国ほか63名、延べ171人参加)
- 2月11日～12日 越冬地分散に向けてオホーツク地方の関係者を訪問(百瀬・富山)
- 3月2日 釧路湿原自然再生協議会 地域づくり小委員会に出席(百瀬)
- 3月3日 河川協力団体会議に出席(於:札幌 百瀬)
- 3月10日 北海道開発局の北海道横断自動車道(阿寒～釧路)タンチョウ保全対策検討会に出席(百瀬)
- 3月10日 第29回釧路湿原自然再生協議会に出席(百瀬)
運営会議 6名出席
- 3月12日 舞鶴遊水池にタンチョウを呼び戻す会総会に出席(於:長沼町 百瀬)
- 3月16日 環境省のタンチョウ保護増殖検討会に出席(百瀬、富山、百瀬ゆりあ)
- 3月17日 釧路自然保護協会ほかによる釧路市への太陽光発電事業についての要望書提出(百瀬ゆりあ)
- 3月17日 根室振興局農地課のヒアリング
- 3月23日 別海町のスラリーで保護収容されたタンチョウの標識放鳥に協力
- 3月24日 津別町役場でRCCの活動支援について要望(井上、百瀬)

< 会 員 > (3 月 3 1 日 現 在)

会員数：170名（運営会員：26名、個人サポート会員：144名（卵101、ひな40、若鳥2、成鳥 0、終身 1）

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Forty-eighth issue April, 2023

<表紙写真 Cover photo>

給餌場から飛び立つタンチョウ(鶴居村)

Red-crowned cranes flying out of
a feeding station (Tsurui Village)

撮影者：安井 葉子

認定特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>